

会議議事摘録

会議名	2021 年度第 2 回学校関係者評価委員会
開催日時	2021 年 11 月 20 日（土曜日）10：00～12：00
場 所	本校 506 教室
出席者 (敬称略)	①委員：赤塚敦子（看護関連業界関係者）、石川幹夫（卒業生）、伊藤由紀（高等学校関係者）、篠塚 功（医療事務関連業界関係者）、西村拓也（くすり関連業界関係者）、藤井寿和（福祉関連業界関係者）（計 6 名） ②学校：橋本正樹（校長）、榊原幸之（事務局長）、村山由美（医療秘書科学科長・医療事務科長）、深澤由紀子（医療秘書科副学科長）、三宅かおり（医療マネジメント科学科長・診療情報管理専攻科学科長・医療事務 I T 科学科長・診療情報管理科学科長）、川畑亮子（医療マネジメント科副学科長・診療情報管理専攻科副学科長・医療事務 I T 科副学科長・診療情報管理科副学科長）、中村博臣（くすり・調剤事務科学科長）、岩上由紀子（介護福祉科学科長）、熊谷 崇（介護福祉科教員・教務委員長）、伊東由美（看護科学科長）（計 10 名） ③委員会事務局：松本晋圭、土屋瑠美子、土方雄太（計 3 名） （参加者合計 18 名）
欠席者	小林麻依子（保護者）
配付資料	①事前送付： □資料 1：2021 年度第 1 回学校関係者評価委員会議事録、□資料 2：2021 年度第 1 回委員会以降の主な経過報告 別添 A：2021 年度進路決定状況、別添 B：2022 年度学生募集状況、別添 C：2021 年度教員研修計画・実績、別添 D：2022 年度生入学前指導プログラム、別添 E：2021 年度前期授業アンケート集計結果、□資料 3：2020 年度学校関係者評価報告書に示された意見・課題への取り組み状況報告（中間点検）、□資料 4：2021 年度重点目標の取り組み状況報告（中間点検）、□資料 5：2021 年度学校関係者評価報告書（案） ②当日配付資料 各種検定・資格試験取得率 ③当日回覧資料 各学科の持ちコマ比率（2021 年度）
議題等	1. 校長挨拶 新型コロナウイルスの第 5 波は収まりつつあるものの、世界規模での感染拡大は相変わらず予断を許さない状況が続いている。 本校の教育活動としては、緊急事態宣言下の前期の授業期間を何とか乗り切り、現時点で学生・教職員の感染者もなく、通常の対面型授業を実施している。学科によっては週 1 日程度、オンライン授業に適した科目を中心にオンラインの日を設け、今後の状況に柔軟に対応できるよう体制を整えている。 昨年来のコロナ禍は学校教育にとっても極めて異例の事態で、各学校の変化への対応

力が問われたと言える。現状の危機に対する過程は、よりよい未来に向かうための変化の機会でもある。これまで変えられなかったことや現実と乖離し、理想にすぎないとされてきた新たな試みも、実現に向けてその第一歩を印すことができるかもしれない。二度とコロナ禍の前の教育には戻れないという覚悟で、前を向いて、よりよい教育の形を教職員の協力の下、つくり上げることができればと考えている。

学校関係者評価委員会は、年明けのあと1回を含めて、合計3回の開催を予定している。委員の皆様には引き続き本校のサポーターとしての貴重なご意見をいただきたい、との挨拶が行われた。

2. 前回委員会議事録の確認（資料1 参照）

前回議事録案について諮ったところ、委員から特段の意見はなく、委員長の指示による一部の字句訂正をした上で公開することが承認された。

3. 経過報告（資料2 参照）

・2021 年度第1 回委員会以降の主な経過について

事務局長、教務委員長、委員会事務局より、資料2（別添A～Eを含む）に基づき報告し、確認、了承された。委員からの質問・意見及びその回答は別紙のとおり。

4. 2020 年度学校関係者報告書に示された意見・課題への取り組み状況報告（中間点検）（資料3 参照）

資料3に基づき、基準の大項目ごとに質問・意見を徴し、確認、了承された。委員からの質問・意見及びその回答は別紙のとおり。

5. 2021 年度重点目標の取り組み状況報告（中間点検）（資料4 参照）

橋本校長より資料4に基づき、別紙のとおり中間点検報告が行われた。

6. 2021 年度学校関係者評価報告書案について（資料5 参照）

報告書案については特段の意見はなく、別紙のとおり各委員からの総評を徴した。

7. 意見交換など

時間の関係で割愛することとした。

8. 次回日程、その他

事務局より次回日程について諮り、暫定的に3月13日（日）とすることが確認、了承された。

以上

2021 年度第 2 回学校関係者評価委員会の主な討議内容

次第 3. 2021 年度第 1 回委員会以降の主な経過について（資料 2 参照）

○榊原事務局長、熊谷教務委員長、事務局より資料 2（別添 A～E を含む）等に基づき、以下の報告が行われた。

1. 学生の状況関連（説明者：榊原事務局長）

(1) 退学の状況

- ・前期までの退学者は 2 年生の退学者が少ないことが引下げにつながっている。

(2) 2021 年度進路決定状況（別添 A 参照）

- ・10 月末時点の内定状況は、前年同時期を大きく上回っている。前々年度と同率であることから、コロナ禍の前の水準に回復してきていると見ている。
- ・求人は、特に医師事務の求人が高い伸びを示している。
- ・内定先は、大学病院が前年同時期を大きく上回っている。国公立病院でも多く内定している。

2. 学生募集関連（説明者：榊原事務局長）

(1) 入学試験及び出願状況（別添 B 参照）

（検定・資格試験取得率）（説明者：事務局土屋）

- ・この表は卒業時点での取得率で、過去 3 年分を記載している。

3. 教務委員会関連（説明者：熊谷教務委員長）

(1) 2021 年度教員研修実施計画・実績（別添 C 参照）

- ・前回委員会以降に追加されたものは、備考欄に追加と記している。

(2) 2022 年度生入学前指導プログラム（別添 D 参照）

- ・前年はコロナの関係で中止をしたが、今年度は実施できるように準備を進めている。
- ・密を回避するために午前・午後の 2 部に分けて実施する。
- ・内容はスクーリング I と II の 2 部構成で、I はレクリエーションを通じた友達作り、親睦会、II は授業体験、模擬授業などを予定している。

4. アンケート関連（説明者：事務局松本）

(1) 2021 年度前期授業アンケート（別添 E 参照）

- ・前期の集計結果を資料①～③のとおり報告する。

5. 職業実践専門課程関連（説明者：事務局松本）

- ・現在認定されている医療事務分野、福祉分野、看護分野は 7 月に第 1 回の教育課程編成委員会を実施した。
- ・くすり・調剤事務分野は、8 月に申請を行った。結果は 2～3 月になる。

6. その他（説明者：事務局松本）

- ・高等教育の修学支援新制度（高等教育の無償化）の来年度の認定について手続きを行い、8 月 31 日に継続の認定を受けた。

○委員からの質問・意見と回答は次のとおり。

委員からの質問・意見	質問・意見への回答
授業アンケートの結果を見ると看護科は全体平均より若干低いが、教員の体制（兼任の比率が高い）が影響していることはないか。 内定は正職員の採用と捉えてよいか。 内定先の書き方がグループだったり病院名だったりするが、グループ本部の採用と病院個々の採用の違いか。 教員研修は、教育内容に反映させることが目的だと思うが、研修の成果が業務に生かされているかどうかはどう評価しているか。 看護科のアンケートの回収率が低いが、3年生はどのぐらいだったのか。また、高い学科の回収率はどのぐらいか。 アンケートの設問の中に、教員の熱意を感じるか等、人によって基準が違って回答しづらいものも見受けられる。設問の見直しをしているか。アンケートの結果について学校側の見解や次期に向けての対策などはどのように取り組んでいるか。	アンケートの回収率が悪かったことと、兼任の先生の授業は基礎科目が多く、内容が難しいことが影響しているところはある。 正職員で採用されている。 グループでまとめて採用のあるところはグループ、グループの中の一病院であってもその病院独自で採用になっているところは病院名を記載している。 所属長が人事考課をするときに、どのような研修を受けて、どのように生かしているかは必ずチェックしている。教育の場合は、すぐに結果が出るものではないことも含めて判断している 3年生はアンケートを実施した科目が4つで、難しい科目が多かった。今回の評価、回収率を見て、アンケートの実施と回収のタイミングなどを検討しなければいけないと思った。 昨年からWeb化して、今年の前期からは授業内で必ず行わなくてもよいことにしたところ、極端に回答率の悪いものが出てきた。今後回答率を高めるよう各学科で検討する。 質問項目は3年に1回改定している。今回はWeb化に当たって大きく変えた。次回は来年度検討して再来年度に反映させる。緊急性の高いものについてはその都度修正をかけていく。 アンケートは各期の中間（7～9回）で行っているので、残りの授業に生かしてほしいとアナウンスをしている。Web化により速報版を各先生が自分のパソコン等で確認できるメリットがある。 Web化したことで、アンケート結果を見ていない先生がいることが数字上出ている。趣旨を理解してもらい、見ていただくように事務局で連絡をするなどの工夫をしている。

アンケートは、数値より自由記述の部分が重要だと思うので、この委員会にもそれをまとめた資料を出してほしい。グラフ化された数値に一喜一憂する必要はない。 介護福祉科のこの時期の内定状況があまりよくないのは、活動が遅いのか。	データは全て取りまとめているが、委員会の中では全体を概観するという意味で資料を出している。自由記述も含めて学科長が全て見ているので、個別の先生との対応の中で参考になっている。 9月、10月の実習、あるいは1月の最後にある国家試験が終了してから活動することになる。
---	---

次第4. 2020 年度学校関係者評価報告書に示された意見・課題への取組状況報告（中間点検）（資料3参照）

○委員からの質問・意見と回答は次のとおり。

委員からの質問・意見	質問・意見への回答
診療情報管理専攻科で行った卒業生による実務的な研修は、他の学科でも活用できるのではないかと思った。 介護福祉科の人材育成像の中には、今、国が進めている段位制度を意識したものが入っているか。 看護科は、日本看護協会のラダーを踏まえての育成像を考えられているか。 看護協会がはっきりと看護師像を示しているので、そのエッセンスは入れておいたほうがよい。 介護福祉士の段位制度は重度の事業所における評価という要素が強く、軽度を預かっている施設では評価しづらいケースがあるが、現場から見て、専門学校卒業者の方がキャリアアップにつながる制度になっていると感じている。 教育活動の中で、医療系各学科で「将来のキ	ご意見として伺った。 カリキュラムを通じて満遍なく学ぶことが将来のステップアップにつながっていくと考えている。 看護は基礎教育なので、臨床で求められているラダーではなく、厚生労働省が提示している卒業時の到達目標に向かって教育をしているが、臨床との情報共有などを通じて、意見を取り入れながら見直しをしている。 現場では臨床判断能力が求められるので、そこにつながるような校内実習の在り方を工夫して取り組んでいる。 ご意見として伺った。 キャリアデザインという授業の中で、1年次にキ

キャリアプラン・目標を設定し、その実現のために主体的に学ぶことができるよう指導している」とあるが、これは学生一人一人が個々に目標を設定して活動しているという理解でよいのか。 文書化しておくことでいつでも見返せるし、そこに向かっていく力が湧いてくるので大変よいことだと思う。 Zoom のブレイクアウトルーム機能を用いたグループワークや ICT 機器を活用したアクティブラーニングの実態が知りたい。 検定・資格取得の面で、秘書検定では過去最高の合格率、医師事務作業補助者も最大の合格者など、コロナ禍にあっても結果が出ている。合格率を上げるための強化策があったのか。 現場では実習経験が少ないことによってギャップが激しく、新人を育てていくのが難しい。1 年目の離職率はどうなっているか。	キャリアプランを設定している。 ブレイクアウトルームは、小分けしたグループでディスカッションし、その内容を発表し合ってフィードバックするアクティブラーニングも可能である。 一部の教科ではスマホのアプリを使って反復練習するような学習方法もあり、どの程度そのアプリを使っているかを教員が見ることができる。発表形式の授業では、グーグルフォームを利用してその場で質問をしたり、一番よかったものを投票するなど、いろいろ工夫している。 グーグルフォームで質問を回収し、多い質問をシェアするため、オンデマンド教材を使ってクラスルームで配信している。 秘書検定は準 1 級の合格率が上がったが、2 年生の共通科目に秘書検定準 1 級を受けるカリキュラムを設け、筆記は授業で集中的に行い、実技は全員に手厚く指導した結果と考えている。 医師事務作業補助技能認定試験は、昨年度の途中から在宅受験が認められたことにより、受験率がほぼ 100% になり、成果も出た。一部の学科問題はグーグルフォームで配信したり、不正解の理由が見えるようにした。それも貢献したと思う。専攻科ではアプリの活用が有効だった。 離職率の調査はできていないので、数字がつかめていない。 今年の 4 月に入職した学生は医療現場での実習を全くしていない状態だったので、こんなはずでは
--	---

医療事務系の学科が3つになったが、それぞれの違いや進路が分からないと選びにくいと思う。見学会などでどう対応されているのか。 デュアルシステムを導入するのであれば、むしろ3年制にした方が学生が集まるのではないか。 医療秘書科は今年か来年に創立 50 周年を迎えると思う。今年度から男子学生を受け入れているが、男子学生の募集に力を入れた募集活動はできないか。 クラスに男子学生が数名いることで、何か影響はないか。 地域貢献、社会貢献のボランティア活動の実績はあるのか。 本校の基本方針である TPC について、学業だけでは同じ世代、同じようなコミュニティの中での対話になる。ボランティア活動を通して世代を超えた人たちとコミュニケーションを取ることが役立つと思うので、もっと推進してもよいと思った。	なかったという早期の離職が高かった印象もあるが、実態は分からない。今の若年層の方は、一回就職したら定年までいるような意識ではないので、価値観の違いが大きいかなと思う。 案内書には明確に示してある。オープンキャンパスの場で学科の選び方の話をして、あとは個別の面談の中で、入学者の志望に合わせてアドバイスをしている。 最近では、在学中は学校にいたいという学生が多く、インターンシップも1月からにした。デュアルについては選択可能なので、学生にマッチするように必要な修正は加えていきたい。 今は、男子学生獲得のための特別な対応はしていない。 男子学生がどう思っているか酌み取れていないところもあるが、就職は男子も必要とされているので、将来に目を向かせた指導をしている。 今の若い人たちの感覚は昔と違うので、間口を広く取って、募集に対しても入学者たちがどう考えているかに焦点を合わせないといけない。 コロナの影響で昨年、今年とできていないが、特別養護老人ホームのお祭りの手伝いに行った実績があった。 最近、文部科学省から、高齢者に対して ICT 教育を行うに当たり、学生がサポートすることをボランティアとして認めるという通知も来ている。ボランティア活動に対しては単位を与えられるようになっているので、その辺もきちんと案内していきたい。 学校が地域にどう貢献するかという点では、サロンのようなものを校内で実施し、そこに学生が参加するような仕掛けも考えていければと思う。
--	---

自主的に参加する学生は少ない。ある程度課題として付与してでも体験した方が、幅が広がるのではないかと思います。	専門学校の学生はアルバイト等でかなり忙しい。ボランティアは有効な面もあるので、カリキュラムの中にある程度位置付けて、広げていくことを考えていきたい。
---	---

次第 5. 2021 年度重点目標への取り組み状況報告（中間点検）（資料 4 参照）

○橋本校長より、以下のとおり報告があった。

①TPC の育成と強化

- ・学びの楽しさを自分で発見し、就職してからも自分で学んで変化に対応していける人材を育てることに重点を置いた。
- ・教員には教え過ぎず、深め過ぎず、学びの興味を喚起するような仕掛けを工夫していただくようお願いしている。
- ・病院事務実習は、期間を少し短くし、不足分は代替授業で行う。これまでの病院実習の在り方を再度検討する機会だと思っている。

②新たな入学者層を対象とする教育プログラムと学びのサポートプログラムの開発

- ・外国人留学生については、本国にいるときからアプローチをする必要があるので、外部の教育機関を通じた現地との提携も考えているが、コロナ禍で極めて進めにくい状況になっている。

③入学者定員の充足

- ・出口目線で考えるのではなく、募集活動の網を広げて受け入れていく。職業人教育の中で目覚める学生もいると思うので、力を入れていきたい。

次第 6. 2021 年度学校関係者報告書案について（資料 5 参照）

○各委員の総評

コロナ禍の中で、学生や教員の感染防止対策に取り組むとともに、いろいろな制限がかかった授業においてオンラインを含めて工夫されてきた。これらの成果が現れてきていると思う。引き続き工夫をして、教育の向上を図ってほしい。

昨年度の同時期に比べるとオンライン授業のスキルが向上していると思う。募集活動においても強みになると思うのでアピールすると良いと思う。

いろいろな縛りはあるものの、高校では学年ごとに文化祭をやるなど、日常を取り戻そうとしている部分がある。行事がないと高校でも専門学校でも授業だけになってしまう。学校行事は自分で計画を立てて動く重要なものなので、難しい中でもできる工夫があってもよいと思った。

コロナ禍の中でも入り口から出口までクオリティを落とさず学校運営をされていることに敬意を表したいが、それだけでなく、以前より実績を上げていることに一層の敬意を表したい。引き続き創意工夫をお願いしたい。

コロナの影響を受けている中で、卒業生を招いての実務的な実習や、ICT を使った工夫をされてきたの

は素晴らしいことだと思う。各評価項目、活動内容を確認させていただき、コロナの影響をあまり感じさせないどころか、今まで以上の活動ができたような印象を受けた。アンケートの数値も極めて高く、就職先も医療業界の人間が見たら素晴らしい病院である。先生方の活動が十分に結果に結びついていると思うので、引き続き頑張ってください。

介護の分野が弱かったのは変化への対応である。こちらの学校は変化に対応しながら、新しい形をつくっている。変化に対応しながら学んだ人材は貴重だと思うので、大切にしてほしい。SDGs のジェンダーの部分を見ていくと男子学生の受入れも必然であり、社会の変化に合わせた学校の取り組みができていることが確認できた。

コロナ禍の中で学校側の対応がしっかりできていた。ICT や Zoom など新しいことにチャレンジされているのは素晴らしいことだと思う。コロナ前の日常に戻ることはないと思うので、アフターコロナの世界観という意味でも、引き続きブラッシュアップして進化してほしい。また、YouTube で配信されているものも非常にクオリティが高いので、いろいろなことにトライしてほしい。よさがもっと広まれば、募集にもつながると思う。

以上